

第2回中学校区学園化構想第2ステージ検討委員会 議事録 概要版

日 時	平成28年7月11日（月）15:00 ～ 17:00
場 所	掛川市教育委員会 会議室
内 容	
<p>1 開 会</p> <p>2 教育長あいさつ</p> <p>3 委員長あいさつ</p> <p>4 協議事項</p> <p>(1) かけがわ型小中一貫教育の在り方について</p> <p>ア 事務局より説明</p> <p>①小中一貫教育の定義</p> <p>②第1ステージの成果と課題</p> <p>③掛川市における今後の児童生徒数の推移、学級数が少ないことによる課題</p> <p>④小中一貫教育の導入によって期待される効果、可能になること、課題等</p> <p>⑤小中一貫教育の先行事例や学校施設の整備例</p> <p>イ 武井委員長より</p> <p>①小中一貫教育注目の背景</p> <p>②様々な小中一貫（連携）教育</p> <p>③小中一貫教育の可能性、ハードル</p> <p>④掛川市での導入に向けて</p> <p>ウ 協議「教育、地域社会、施設、財政の面から、掛川市の方向性をどう考えるか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1ステージの成果と課題がよくわかった。 ・公共施設マネジメントと一緒に、全体の施設の在り方を考えていくことは、とても重要である。 ・日本は、学校開放を積極的にやっている。スポーツ施設は、学校施設が生涯スポーツの核になっている。学校開放がどの程度行われているか、資料があれば更にわかりやすくなる。 ・掛川市は、これまで一体化構想に向けた積極的な支援をやっていると感じた。 ・小学生がもう少し早い段階で中学校に入っていく手立て（合唱コンクール）を行ったが、それが今でも続いていて嬉しい。 ・市は、学校に対して年にどれくらい経費を払っているのか。 ・未来に向かって小中一貫校を検討していくのがよくわかった。 ・小規模校のデメリット（下記参照）をすごく感じる。 <p>人間関係：子ども同志の人間関係が変わらない。切磋琢磨する力、他者と関わる力を育む場面が少ない。新しい友達を作る努力をしなくて良い。</p> <p>学力の面：多くの友達と一緒に過ごす中でもっと勉強しようとか、多様な考え方に触れることで、新しいものを学ぼうとする経験値が少ない。</p> <p>職員業務：小規模校の職員は、大規模校の職員に比べて一人当たりの校務分掌の量が多くなる。出張も一人当たりの回数が増え、その分自習時間も増加するため、子どもたちの学力にも影響が出る。</p> <p>授業研究：単学級の場合は、各授業ごと1年に1回の授業実践しかできない。複数学級の場合は、1回目の授業実践を踏まえて、更に改善した授業案で実践ができ、それを見せ合うことで授業力を高めることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来的には、子どもの数を増やすとか、選択の幅を与えていく教育は地域の理解を得ながら進めていくとしながらも、何百万何千万と耐震のお金をかけていただいて 	

おり、何かもったいないという気がする。

- ・小中の交流はあるが、同中学校区内の小学校同志の交流が少ない。小小連携を強くした方が良いのではないか。その方が、学園化にはなるのではないか。
- ・原泉小の統合時は、小小連携を積極的にやっていたのでとても大事。
- ・大規模校は、小規模校との交流を必要としていない。理由は、子どもがたくさんいるので、自分の学校の中で交流ができています。
- ・小規模校は、交流を必要としているため、小小連携を積極的に進めている。
- ・人数が減ってしまうことに愕然とした。校舎の老朽化も勉強になった。
- ・原谷小と原田小の児童は、幼保園であんりに行っている。あんりで一緒に過ごし、小学校は別になり、また中学校で一緒になる。幼保園でのつながりも大切にしていける方がいいのではないか。
- ・日坂小と東山口小児童も、さかがわ幼稚園で3年間一緒に過ごしている。保護者の中には、日坂小東山口小と一緒に過ごすことに大賛成の意見もある。
- ・幼稚園で多い人数で過ごし、小学校で少ない人数となる。もうちょっと揉まれたい年代で少ない人数というアンバランスな状態になっている。
- ・幼稚園部は地域とのつながりがある。保育園部は保護者の勤務先との関係が多い。
- ・小中一貫でなければできない、単独の小学校や中学校ではできないことを考えていかなければ、なかなか受け入れられないだろう。
- ・中学校の先生が、小学校に行って英語を教えるのは、現状では物理的に難しい。
- ・ここで一つの方向性を示した方が良いものもあれば、各地域で事情が違いすぎて、その地域特有の答えを出した方がよいものもあると思う。
- ・地域と共にある学校施設として、地区センターがあり、地域連携室があり、放課後児童クラブがあり、放課後子ども教室があり、共同資料室があり、それを入れていけば新たな太陽になっていくと思う。
- ・現状の施設を将来にわたって維持することは現実的にはない。必ず集約して行かなければならないという大前提はある。それをどうやって集約するかは、いくつかの選択肢がある。全体としては、規模の適正化を図っていく。長期的なビジョンのもとで公共施設の在り方を考えていく。【①】
- ・学習面からみると、小規模校による弊害が明らかである。計画的に見直しを図っていく。【②】
- ・ある一定数以上の規模があった場合、どこにどんな可能性や課題があるか、もう少し議論が必要である。
- ・学校間の接続について、今までは小中で考えていたが、実際の子どもの育ちを考えると長期的な見通して見る必要がある。保幼と小の接続関係の資料がほしい。【③】
- ・地域がどういうふうを考えているか、これを真剣に考えていかなければならない。
- ・学校が飽和状態になってきている現状で、頼ることができるのは地域である、学校と地域は持ちつ持たれつの関係である。地域にとって、最も望ましい学校とはどういうものか同時に考えていかなければならない。【④】

◆ 4つの視点に絞りたい。

- ①公共施設のマネジメント
- ②小学校と中学校のカリキュラム
- ③学校間の接続
- ④地域

(2) 小中一貫校の視察について

- 1 日 時 平成28年 9月12日(月) 午後12時30分から午後5時まで
- 2 行き先 浜松市立庄内学園 〒431-1208 浜松市西区庄内町100番地
- 3 集合場所 掛川市役所南側駐車場 (市バスで移動)

5 連絡事項

6 閉 会